

「退陣か、解散か」 は容易ではない～

政界展望



方向性を打ち出すのを「年内に」となぜ定めなかったのか？

ジャーナリスト

鈴木哲夫

2024年、岸田政権 ～政治不信の払拭



「魔の1ヵ月」

この年末年始を私はそう位置付けた。

臨時国会が終わって通常国会が始まるまでの期間。政治資金パーティーをめぐる政治資金規正法違反事件で、東京地検特捜部が本格捜査に着手したが、現職議員の捜査や不逮捕特権など国会開会中は思うままに捜査はできない。ならば、閉会中のこの1ヵ月に捜査は大きなヤマを迎える。

さらに、岸田文雄首相は、安倍派閣僚一掃などの人事だけでは国民の不信はとて払拭できない。次の通常国会までに、政治資金規正法改正や派閥のパーティー禁止など思い切った手を打たなければ政権の前途は危うい。これが「魔の1ヵ月」。政局の極めて大きな節目という意味だった。

本稿を執筆しているのが12月22日。読者のみなさんの目に触れるころに事態がどうなっているかは不明だが、これを機に、自民党が政治とカネの問題に本気で取り組まなければならない。すでに岩盤と言われてき

た約3割の政党支持率を切っている。政党の深刻な危機だ。

岸田首相は、政治とカネについて、党改革について議論する新たな組織を立ち上げたが、その方向性を打ち出すのは「1月をメド」とした。年末年始の1ヵ月に恐らく特捜部の捜査は進み、裏金に関する様々な実態もさらに明らかになり、世論は一層厳しくなる。岸田首相は先手先手を打って、たとえば「年内に」となせ定めなかったのか。「捜査の進展やどんな立件となるか様子を見ながらどこを改革するか変わってくるから」と首相周辺は言うが、これまでも後手に回って支持を下げているというケースがヤマほどあった。「危機管理対応が遅い政権」をまたまた露呈した。

改めてこの事件を振り返る。自民党の各派閥の政治資金パーティーで、チケットを大量に販売しながらその一部を政治資金収支報告に記載せず、いわば事実上の「裏金」としていたことが発覚した。

一部は、ノルマ以上に券を売った議員にキックバックされていたが、それだけではない。「選挙の際の表

に出さない軍資金や交際費などにも充てていた」（自民党政治家秘書証言）ことも指摘された。

疑惑を最初に取り上げたのは「しんぶん赤旗」日曜版で昨春秋。その後、神戸学院大の上脇博之教授が地道の収支報告書などを調べ上げ今年初め東京地検に告発した。そして、特捜部が単なる記載ミスではなく、派閥が組織的に裏金を作り運用していたのではないかと本格捜査に着手したのだ。

告発の段階でもっとも不明金が多かったのが最大派閥で長期政権を維持してきた安倍晋三元首相の派閥・安倍派。不記載は二階派、茂木派、麻生派、岸田派の5派閥に及び構造的なものだ。

特捜部の本丸は安倍派だった。旧知の検察OBがこう解説した。

「強権を維持してきた長期安倍政権は時として検察の動きにも関与し圧力もかけてきた。検察にしてみれば、そのお返しに安倍派に手を伸ばしたと見ていい」



じつは、パーティー券疑惑が大きくなることを早々に予測していた党幹部もいた。

岸田首相が年内解散を断念したと一斉に報じられた11月上旬。岸田首相が信頼する党幹部の1人はごく少人数の会合で首相にこう言ったという。

「とんでもなく大変なことが起きる。来年になったらもう解散なんかない」

当時、この情報が首相周辺から漏れ、一部の議員らの間を駆け巡った。

「大変なこととは何か。いろんな見方の中にパーティー券問題もあがったが、記載ミスで修正すればいいといういつもの政治資金規正法の処理で終わると多くが思っていた」
(自民党閣僚経験者)

しかし、まさにそれだったわけだ。「首相に進言した党幹部は、今年7月に特捜部が一部の派閥の会計責任者に収支報告に関する資料を任意で提出するように言ってきたことなどを把握していた。捜査の動きをキャッチしていた。だからこそ火がつく前に早期に年内解散すべき。勝てば岸田統投は国民に信任されたこ

とになり、そのあとにパーティー券疑惑が出ても淡々と対処すればいい。退陣などにはつながらないからいま解散を、という意味だったのだから」(前出閣僚経験者)。

そうした進言を受けながらも、岸田首相の当初の心情は、そこまで慌てていなかったと首相に近い自民党三役経験者は言う。

「パーティー券問題でターゲットになっっているのは金額の大きい安倍派、二階派。しかし、岸田首相にしてみれば、安倍派や二階派の力が削がれ支配から免れることができる。さらに今後、パーティー規制や政治資金規正法に手を付けてこれをさらにうまくチャンスに替えればむしろプラスになると考えていたのではないか」

同様の見方をする自民党議員やマスコミも多かった。

ところが、こんな話もあった。「(首相と)会話していても成り立たない。とても平常心じゃない」
こう話したのは意外にも小池百合子東京都知事周辺。
じつは接点などなさそうな2人がすれ違ったのはドバイで開かれたC

OP28。ここに小池知事も出席していたのだ。同行した知事周辺が明らかす。

「2人は衆議院初当選同期。仲もいいし自称飲み仲間でもある。小池知事が官邸などに行ったときなども結構2人は気軽に話すのに、ドバイ

でこちらが話しかけても岸田首相は心ここにあらずといった感じだった。目線もどこかを向いていて無表情。返事も何か噛み合わない。知事



選挙の際の表に出さない軍資金や交際費などにも充てていた



会話していても成り立たない。とても平常心じゃない

も、驚いて『どうしたんだろう』と。ちょうどこの日、日本で安倍派の裏金疑惑や特捜部の動きが一斉に報じられた。だからか、と。相当気にしてゐると我が方は知事も含めあと

になつてみんなで納得した」岸田首相は、自身が会長に就いていた岸田派を首相在任中離脱するとした。しかし、そもそも首相就任に伴つて派閥を離れるのが慣例だったにもかかわらず会長にとどまつてきた。

菅義偉前首相から「派閥政治を引きずる」と批判を受けていたにもかかわらず問題ないと意に介さなかつた。

「いまごろ辞めて、『中立の立場で改善策を進める』など見え透いたアピール」（立憲民主党幹部）と野党各党は批判する。その通りだ。松野博一氏ら安倍派の閣僚や党の要職を代えたところでそれだけでは済むはずがない。特捜部の捜査がすでに二階派などにも及び、同派所属の法相など2人の

閣僚が急遽派閥離脱したが遅きに失する。国民は納得しないだろう。

そして、通常国会も引き続きこの問題で野党の一斉攻撃で、予算案審議どころではなく国会はストップする。政治とカネの問題へ国民世論は厳しい。物価高や増税で生活が厳しい中だからこそなおさらだ。マスコミの世論調査による内閣支持率も年末に次々と20%を切り10%台。危険水域をすでに下回っているという事態なのである。

退陣か解散か二者択一？ どうなる「ポスト岸田」

そもそも、政治資金の問題が表面化する以前に岸田内閣の支持率は下落の一途を辿っていた。

永田町で、自民党議員らと話すと、「ポスト岸田」「岸田おろし」といった話題はもはや公然と語られる。ざっと、最近の私の取材メモだ。

「来年の総裁選で、もはや岸田再選はよほどのことがない限り無理。河野太郎氏（規制改革担当相）は以前から勉強会を立ち上げているが、高市早苗氏（経済安全保障担当相）

もここへきて勉強会を立ち上げた。中身じゃない。ポイントは何人集まっているか。（総裁選の）推薦人に必要な20人が集まっているかどうかだ。河野氏の方は登録は20人以上いるが、高市氏は集まったのは15人くらいと聞いている。いずれにしても、ポスト岸田に名乗りをあげたということだ」（自民党閣僚経験者）

「石破茂元幹事長は、特に政治資金事件が出てからメディアなどにポスト岸田候補、無派閥議員ということで盛んに呼ばれ、その場で遠まわしながら意欲を見せている。マスコミの各社の世論調査で1位や上位。国民的人気は相変わらず高い。菅義偉前首相や二階派などとも距離が遠くはなく、反主流派の菅・二階（俊博）両氏にとつては、ポスト岸田の貴重なカードになってきている」（二階派ベテラン議員）

「そもそも茂木敏充幹事長は（ポスト岸田に）意欲を持っている。いまは麻生・茂木・岸田の主流三派で岸田政権を支え、キングメーカーの





河野太郎氏(規制改革担当相)は以前から勉強会を立ち上げている

麻生(太郎)氏に流れを作ってもらい岸田氏からの禅譲を考えていた。しかし、ここまで岸田氏の支持率が低いとくつついていたら心中してしまう。タイミングを見て岸田氏と距離を取り、次期総裁選への出馬の

準備を進める可能性はある」(麻生派議員)
「上川陽子外相の名前が浮上しているが、これは岸田首相サイドのリークだろう。岸田氏は、自分が退陣せざるを得なくなってもその後も

影響力を保ちたい。自分の派閥から、上川氏を後継にしようというのではない。岸田派にはエースの林芳正官房長官もいるが、上川氏のほうが女性初の首相などみんなが乗りやすい。しかも上川氏は反主流派の菅氏とも関係がいいので好都合ということだ」(安倍派ベテラン議員)

ただ、自民党元選対幹部のベテラン議員はポスト岸田が決まるそのポイントをビシヤリと断言する。

「いろんなことが言われるが、今回は、その基準、条件、要素は政策なんかではない。『選挙の顔』。それしかない」

前々月号でも少し書いたが、岸田政権の支持率が低下する中で2023年後半に行われた全国の地方選挙で自民党は敗北、大苦戦が続いた。

まず9月。東京・立川市長選では元立憲民主党都議が自民党推薦候補を破った。翌月には、2議席を争う都議補選が行われたが当選は都民ファーストと立民の2人。何と自公候補は一角にも入れず落選した。

10月22日、衆参補選と同日の埼玉県所沢市長選挙は4選を目指した自

公推薦の現職が落選し、宮城県議選は自民5人が落選した上に自公合わせても過半数割れ。

11月、東京・青梅市長選も自公推薦現職が敗北。同日の福島県議選は自民が改選前から2議席減で単独過半数割れ。都市部、地方に限らず敗れている。

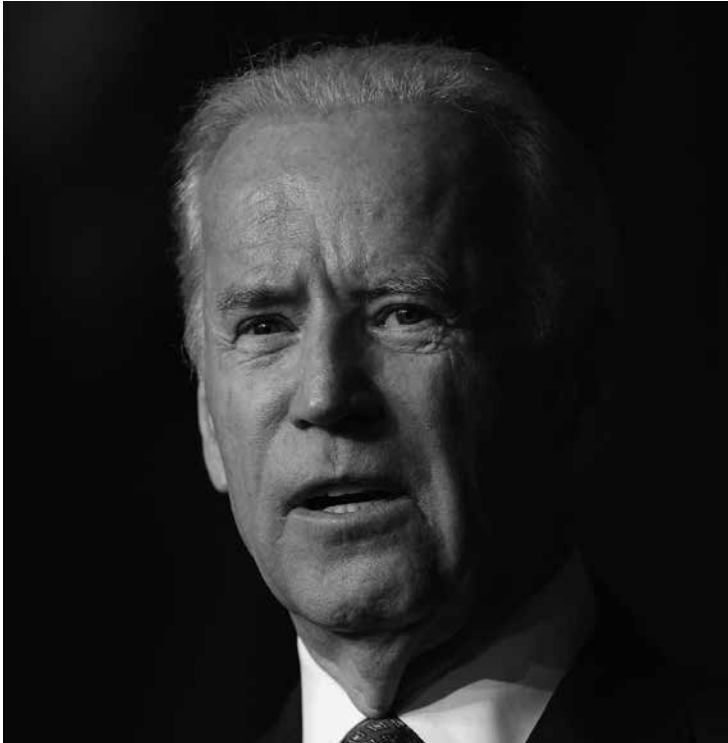
地方の声を取材すると…。

「争点は、地方選挙とは関係ない。国政の物価高対策や増税。減税とは言いながらいや岸田首相は増税するんだらう、と。野党は国政批判を展開した。非自民の波を地方からと訴えた。長い付き合いの商店街の商店主などは『今回は岸田さん支持できない』とうちには(票は)入れないと言われた」(自民宮城県連幹部)

深刻なのは東京だ。立川市長、立川補選、青梅市長と自民は何と3連敗。東京23区の自民党区議が言う。

「朝駅に立って演説してもまず足は止めない。通りすがりに、『増税やるんだろ』『岸田首相は』何やりたいの?」など真顔で言われます。





先がない岸田首相をアメリカが招くだろうか

地域の話じゃなく国政で批判され、それが地方選挙に直結しています。空気は最悪です」

自民党の地方の苦戦を象徴するこんな選挙もあった。

12月10日に行われた江東区長選挙では、自民は何と天敵の小池百合子都知事に異例の相乗りをした。自・公・都民ファーストの推薦候補が何

とか勝利したのだが…。

「都議会ではうち（＝自民）が第一会派で、小池知事や都民ファーストとは対決姿勢でやってきたが、立川の都議補選では（自民が）負けてついに第一会派に並んでしまった。しかも東京の選挙は3連敗。さらに江東区長選で負けるようなことがあると、五月雨式に総選挙

までズルズル行ってしまう。ならばこれ以上地方組織が傷つけないためには戦わず小池知事との連携を選んだ。頭を低くして行くしかない。このままの支持率では来年の地方選挙も次の総選挙も『岸田の顔』では戦えない」（自民東京都連衆議院議員）

こうした地方の声は中央を動かす。2001年。支持率低迷の森喜朗政権を退陣に追い込んだのは地方選挙を抱える東京や熊本などの都連・県連だった。総裁選前倒し運動を展開し、まさに、とどめを刺したのが地方組織だった。

じつは来年、地方選挙は何と全国で540以上ある。選挙で大苦境の全国の地方組織の声は党本部や選挙区の国会議員らにもすでに続々と届いている。

前出の元選対幹部のベテラン議員は言う。「2001年の再来は十分にあり得る」

こうして見て行くと、このまま支持率も低迷し政治とカネの問題にも決着をつけることができなければ、岸田首相の選択肢は限られてくる。

1つは地方組織の声などからも、

退陣を含めた総裁再選断念。

「退陣なら、支持率など立ち行かなくなり早々の退陣、来年度予算を最後の責任として成立させ4月のバイデン大統領のアメリカへの国賓招待を花道に退陣、そして来年秋の総裁選まで何とかやって不出馬で退陣などのパターン。ただ、もう先がない首相をアメリカが招くだろうか。都合をつけて訪米がなくなる可能性だってある」（前出三役経験者）

それでももう1つは、ここまで追い込まれても再選を狙うとすればその手段は解散しかない。

「岸田首相は追い込まれると意外と意地になってやる性格だ。再選のためには手は解散しかない。それもいつ勝てるかではなく、負けは分かっている。少しでも支持率が回復するなど最小限の負けで済むときに仕掛ける。自公で過半数取れば次の総裁選で党は信任せざるを得ないという流れを作る」（岸田派ベテラン議員）

退陣か解散かの二者択一か。今年の政治は大波乱だ。

（了）

